



地域の底力

奥会津

# 奥会津書房を訪ねて

福島県大沼郡三島町  
おおぬま みしま

東京から電車を乗り継いで五時間。  
山また山の土地、奥会津に女性たちだけで  
運営される小さな出版集団がある。  
高い質と志を持つ本が、ここから何冊も誕生している。  
未来を担う子供たちのために静かに燃やされる火をたどった。



奥会津書房は総勢4名の女性集団である。  
左から渡部和さん、遠藤さん、中丸恵美子さん、武藤弘子さん。



## 日本でいちばん 山奥にある 出版社

とんがり屋根が可愛い奥会津書房。もともとは温泉施設だった。取材に出かけた1月は例年豪雪が続くが、今年はいちだんと深い雪に埋もれていた。

一月末の奥会津は、まだ豪雪の中にあつた。例年この時期には深い雪が積もるものだけれど、昨年来の記録的な豪雪は、日本海や太平洋から遠くはなれた山間の地に、例年にも増してたくさん雪を降らせていた。会津若松から乗り換えた只見線は、雪崩の恐れがあるため途中からバスによる代行輸送となつた。東京を出発しておよそ五時間、目的地の三島町の最寄り駅会津宮下でバスを降りる。五分ほど、奥会津書房代表の遠藤由美

子さんが、いつもの筒袖のきものともんぺ姿で車を運転し、迎えにきてくださった。

めざす奥会津書房は、おそらく日本でもっとも山奥にある出版社である。社は、もとは町の温泉が廃業したあと、

奥会津書房のオフィスとして貸し出されたものである。とんがり屋根がかわいいが、雪下ろしをした直後だということで、まわりは屋根まで届く雪に覆われていた。中に入ると、昼でも暗い。あちこちに「危険」と書いた紙が貼られている床は、穴があいているのだという。スタッフは女性が四名、プラス雌猫のハナ。

奥会津書房は法人格ではないので、正確には出版集団とでもいうべきだろうか。代表の遠藤



奥会津書房の編集長を務める遠藤由美子さん。  
愛猫ハナもメス。奥会津書房は全員女性である。  
ハナの定位置はお気に入りのパソコンの横(左)



さんは三島町の曹洞宗の寺院・西隆寺に生まれ、いちどは都会で働いた。遠藤さんがふるさとへ帰ってきたのは平成五年のことだった。

「私が育つた頃の教育は、『外に出ろ』というものでした。郡山の短大を出て、東京や横浜でフリーライターとして働き、ずっとそこからふるさとを見てきたのです。でも外から自分のふるさとを、田舎としてみていたとき、こちらに帰ってきたと

きでは見え方が違いますね。都会にいたときは、常に郷里の暮らしなどに対する郷愁がありました。こちらに戻ってから

は、郷愁などというものではないと理解するようになった。遠藤さんがふるさとに戻るきっかけは、三島町に隣接する昭和村の「からむし」振興に関わってくれという依頼があつたことだった。今では「からむし」



昭和村特産のからむし織り。蝉の羽のような薄い着物は風を軽やかに  
通し、夏の装いとして愛されてきた(上)。からむしの繊維を手作業で  
取り出し、糸に紡いでいく(右)(写真提供:奥会津書房)

と聞いても、ぴんとこない人の  
ほうが多数派だろう。蝉の羽よ  
りも薄い夏の着物の最高級品、  
「越後上布」の材料となる植物が  
昭和村のからむしである。細長  
い茎(――メートルぐらいに  
育ったところを収穫する)から  
細い繊維をとり、それを紡いだ  
糸を織って反物や帯にするので  
ある。今は新潟県でも糸を紡ぐ  
人や織り手が少なくなり、価格  
は高くなる一方である。高いも  
のは一〇〇万円を超す。

「昭和村のからむしは昔からそ  
の多くが越後に運ばれ、越後上



布の供給元になっていました。  
私に話があったころも、原料の  
供給地でありながらそれだけで  
はどうしようもないので、織物  
も生産しようと試みていたのだ  
す。その頃織られていたのはつ  
るつるした、機械で紡績したよ  
うな手触りのものでした」

初めてつるつるした反物を見

せられたとき、遠藤さんに蘇る  
ものがあつた。初めて見るから  
むし織だったのに、自分が以前  
からむし織を身につけていたと  
いう記憶。また、当時はこんな  
織物ではなかったという違和感。  
「おかしいですね。そのとき  
蘇ったのは、私が前世に生きて  
いたとして、そのころに身につ  
けていた織物の記憶だったよう  
に思うのです。こんなにつるつ  
るしたものじゃない、もつとざ  
っくりしていたはずだ、という  
確信もあつて」

不思議な記憶にいざなわれて  
三島町に戻り、車で一時間かか  
る昭和村に通い始めた。からむ  
しが生まれた背景を調べたり、  
かかわってきた皆さんの技術  
者に出会うようになって、自分  
が生まれ育った地域の基層文化  
のすこさ、深さを痛感するよう  
になったという。からむしの栽  
培者、繊維をとる人、糸を紡ぐ  
人、機織りをする人……。から  
むし織が出来上がるまでに、実  
にさまざまな人々の工夫や努力  
があつた。だが、ここでも後継  
者不足は深刻だった。

## 都会からきた 女性たちが 価値を発見

昭和村は、後継者育成の手段  
として「織姫候補生」を募集し  
た。主に都会から、何人もの女  
性たちが昭和村に住み着き、技  
術を身につけようと研修を受け  
た。今では織姫も一二期生を数  
える。奥会津書房のスタッフ、  
渡部和さんは一期生の一人であ  
る。一期生はみな、からむし織  
を手がける家にホームステイの  
かたちで同居した。そうでなく  
ても高齢者の多い昭和村に、若  
い女性たちがやってきたのだ。  
しかも、地元の文化に強い関心  
を持ち、高齢者の話に尊敬の念  
を持ちつつ耳を傾けてくれるの  
である。当時の村はどれほど明  
るくなったことが。

「一期生の人たちは、技術者の  
人たちの心情的なことも含めて、  
もつとも深い理解者になってく  
れたんです。これが昭和の伝統  
だ何だという前に、足元の基層  
文化がじいちゃんばあちゃんの  
暮らしの中にしっかりあるとい



三島町内にある寺院はすっかり雪に埋もれていた。  
高齢化が進む奥会津では冬を乗り越えるのも大変な苦労が伴う。



うことを、織姫さんたちがわかつてくれた。でも、それまで地元人間がわかつていたわけではないですね

きものの世界を知る人が驚くのは、実際にきもの作りにたずさわっている職人さんたちの、評価や待遇の驚くべき低さである。いったいどこに消費者が支払ったお金が消えていくのか。機織りの従事者を低く見る傾向は、地元の人々にもあったという。だが、都会から来た織姫は違った。渡部さんがお世話になったのは、当時六〇代の夫婦の家だった。「お父さんがからむしの栽培を

していて、お母さんが織っている。もともとは板金屋さんでしたが、畑はやる、きのこもとるという暮らしをずっとしていた方たちです。私たちのような都会の人間はすれからしなんでしょうね、本当に。最初は、私たちはからむしをやりきたんだから、それ以外のことは関係ないというレベルだったと思います。でもそれぞれの家で一緒に御飯を食べ、季節ごとの行事などを一緒にやつたりしているうちに、村のいろんな決まりごとや村の文化を肌で感じるようになっていきました（渡部さん）

昭和村や三島町など奥会津では、今も行事を丁寧に行う家が多い。夏に訪ねたときは、家々の玄関には端午の節句のときにさしこまれたヨモギや菖蒲が枯れて残っているし、お盆の迎え火や送り火をたいたあともあった。都会では失われた行事やそれに伴う記憶が、現実のものとしてなんとか生きている。

高齢者が守り伝える文化に尊敬の気持ちを抱く織姫が地元の青年と結婚し、定着する例も増

えてきた。嫁不足に悩む自治体は、きつと「織姫制度」をうらやんでいることだろう。

遠藤さんも、からむし織の仕事を手がけるようになり、ときには矛盾に悩みながらも、技術者の人々の言葉にめざめ、ふるさとを見る新たな視点を獲得することができた。帰郷を決めた時点では、そこまで思いは至らなかったはずである。

## 誰にも頼らず 自分たちで 出版事業をスタート

遠藤さんが出版の仕事を始めたのは偶然の産物だった。

「当時朝日新聞福島県版に、三



厳寒となる冬季には、民家の軒下到大根を吊り下げ、「凍み大根」が作られる。同じく餅も凍らせて保存食となる。どこか懐かしさを感じる冬の風物詩。

島町の人々が『奥会津の歳時記』という連載を書いていらしたんです。これを残したいと思って、役場に提案してみたのですが、反応は『なんで本なんか作るんだ？』でした（笑）。それなら自分たちで作るしかないと思って、知り合いに相談してみました。すると、『自分たちで編集して、自分たちでやりなさいよ。そうしたら安くできるから』と。その言葉を聴き、どこにも頼らず、自分たちでやるしかないかと思うようになったのです。一年ぐらい準備に時間をかけていたのですが、その間に県に話が聞こえたのか、地域づくりサポート事業の予算から助成をつけていただきました

その話を聞きつけたいろいろな人が手を差し伸べてくれた。あるカメラマンは長年撮り続けていた奥会津の写真のポジフィルムをどっさり届け、使ってくれと申し出た。地域の人々、特に高齢者に話を聞き、原稿をまとめていくのは遠藤さんたちの仕事である。

最初の三年で生まれた本は、

奥会津書房の出版物。  
奥会津書房ホームページ

<http://kyoritsu.co.jp/Okuaizu-syobou/>



いずれも見事な出来栄である。  
「BOON 文化シリーズ」は  
『奥会津 自然からの伝言』『奥  
会津 森に育まれた手仕事』『奥  
会津 神々との物語』『奥会津  
縄文の響き』『奥会津 生きる』  
の五冊。縄文以来の採集の歴史  
を静かに受け継ぎ、山や森の声  
を聴き、自分たちの知恵を知恵  
とも思わずに生きてきた人々の  
姿が、美しい写真とともに立ち  
上がってくる。何より、これら  
の本が、日本一山奥にある出版

社から誕生したことがすばら  
しい。沖縄学者の伊波普猷が  
「汝の足元を深く掘れ。そこに泉  
あり」と語った言葉が思い出さ  
れた。

もともと、立派な本ができた  
からといって儲かるほど出版事  
業は甘くない。

「最初、お金の出る三年間は役  
員会みたいな組織でやってきま  
したが、その後建設的に会を解  
体して、私たちがいわばセミプ  
ロ集団となり、収益を上げつつ  
仕事をしていきますと宣言しま  
した。とはいえ、一年に一冊も  
できない年があつて、そのとき  
は悲しかったですね」

地方出版社ですぐれた事業を  
展開しているところはたくさん  
あるが、流通の問題もあり、自  
立にはたくさんの課題を抱えて  
いる。遠藤さんは実家の西隆寺  
に住んでいるし、渡部さんも三  
島町の男性と結婚して両親と同  
居している。変な言い方になる  
が、都会で暮らすよりは多少楽  
かもしれないので、なんとかや  
っていける。ほかのスタッフも  
状況は似ている。事業として考

えるのは無理があるだろう。だ  
が、町や地域全体の資産として  
考えれば話は違う。

失われる一方の地域の習慣や  
民俗。大切な言い伝え。高齢者  
の知恵。それを、未来を担う子  
供たちにしっかりと受け継ぐこ  
とができたなら。お金に換えら  
れない価値がそこにあるのはい  
うまでもないが、新しい何かが  
生まれる可能性もはらんでいる  
のではないか。

## 「地域学」の 担い手としても 活動

奥会津書房はその後、「BOON  
N ふるさとシリーズ」の第一  
巻として『奥会津 蘇る記憶』  
などを出版。委託された仕事も  
続け、地に足の着いた活動を行  
ってきた。そして、昨年また転



雪かきに追われる遠藤さん。西隆寺の境内にある立派な山門も、  
赤い帽子と前垂れ姿のお地藏さんも雪の中。

機を迎えた。『会津学』を創刊し  
たのである。東北芸術工科大学  
東北文化研究センター所長の赤  
坂憲雄教授（民俗学）が数年来  
提唱してきた「東北学」の考え  
方に共鳴し、平成十六年十月、  
奥会津の有志が集まって「会津  
学研究会」を発足。月に一度、  
奥会津書房に集まって勉強会を  
開いている。ときには、福島県  
立博物館長を兼務する赤坂氏も  
加わる。赤坂氏は、日本列島全  
体をひとつの歴史でくくるので  
はなく、「東北学」に代表される  
「地域学」が地元の人々によって



展開されていき、「いくつもの日本」が花開くことを願ってきた。読者にも覚えがあるだろう。隣の県でも文化や民俗が違う。いや、県内でも海側、盆地、山側ではいろいろなことが違う。藩政時代の記憶を引きずっている土地も多い。

それなら、それぞれの地域学を育てようというのが赤坂氏の発想である。それに共鳴した人々が、「津軽学」「盛岡学」「仙台学」「村山学」などの活動を始めた。遠藤さんたちも昨年夏に創刊号を出版し、遠藤さんの実家である西隆寺を主な会場として「第一回 会津学ゼミナール」を開催した。二泊三日の合宿形式



えんどう・ゆみこ  
1949年三島町生まれ。郡山女子短期大学卒業後上京し、フリーライターとして活動。その後ふるさとに戻り、昭和村の「からむし織」の振興に携わる。その活動を通じて、奥会津に受け継がれる文化の深さを痛感し、出版事業を手がける。書籍の出版のほか、会津学研究会事務局として『会津学』出版や「会津学ゼミナール」の運営を行っている。

で、本堂を会場に赤坂氏や近畿大学民俗研究所所長の野本寛一氏ら、多彩なパネラーが参加したディスカッションやフィールドワークが行われた。蝉しぐれの境内で行われた議論、突然の夕立の中で敢行された現代舞踊など、忘れがたい印象を残した。

地域の人たちが集まって勉強会を続け、その成果を機関誌に発表する。年に一回はゼミナールを行う。この活動から、また新しい書き手や活動が生まれていくかもしれない。現に、渡部さんが創刊号に執筆した「渡部家の歳時記」は見事なものだった。義理の父母が守ってきたさまざまな行事を、発表するあてもなく記録してきたことが設立

つたのである。それを読むと、奥会津の豊かさ、言葉にならない言葉の深さを感じられる。都会中心、東京中心、「中心」という発想のくびきを逃れる大切さを痛感せずにはいられない。

『会津学』は年に一冊ずつ、必ず発行するつもりです。ゼミナールも続けますよ。ほかに今、イザベラ・バードの『会津紀行』、尾瀬の草花の文庫シリーズなどを進めています。

『会津学』には賞賛、反発、いろいろな反応があった。会津若松ではやはり藩政時代の歴史研究が中心となる。「会津学」というけど、あれは奥会津学だろ」という声がないわけではない。

「それに、赤坂さんが提唱された地域学という考え方が広がっているんです。特に、既に認識されている文化、歴史、風土を地域資源として、それを直接地域活性化、つまり経済にどうすれば結びつけられるかという流れが多いような気がしますね。そういう人たちから見れば、私たちの『会津学』は悠長すぎるかも

しません（笑）」

それを遠藤さんが嘆いているわけではない。それぞれの立場でできることをやる。子供たちに伝える。それが自分たちの責任だと考えているのだらう。奥会津書房が自主企画で発行する本には、奥付にこんな文章が掲載されている。

本当のものが見えにくくなった今

何を私たちは為すべきだろうか  
調和の中にあつた幼き魂は  
どこへ行こうとしているのか  
まだ、きつと間に合う

失った時の彼方に  
子供たちが歩く遠い未来に  
変わらぬ確かなあかりがあると  
信じる

たくさん願いと、たくさん力強い手で  
切り立つ崖を歩こうとする子どもたちの  
その足元を照らそう

取材から三カ月後。奥会津は桜とカタクリが満開になる季節を迎える。